

## 研究ノート

# 特別活動を通じたシティズンシップの育成 —「子ども記者クラブ」の活動を通して—

橋本祥夫

### 1. はじめに

本研究は、2015年度から京都文教大学と城陽市市民活動支援センター、洛タイ新報（研究当初は洛南タイムス）の3者による「住民参画型」の共同研究として実施してきた。地元紙である洛タイ新報の協力を得ながら、小中学生を対象とした「子ども記者」として、地域に出向き、取材した記事を洛タイ新報紙面に年間を通じて掲載してきた。2019年度と2020年度は産経新聞、2020年度からは京都新聞とも提携し、子ども記者クラブの記事を毎月1回掲載してもらっている。

子どもたちの自主性を尊重した自由度の高い活動を展開するために、2019年3月に一般社団法人「京都子ども記者クラブ」（理事長：橋本祥夫）を設立した。地域と連携して、地域の企業、団体からの支援を受け、活動の幅を広げることにした。

宇治市教育委員会の協力を得て、宇治市内の全ての小学校、中学校に募集チラシを配布し、定員を20名として募集する。前年度からの継続での参加も認めているため、最高では4年連続で参加している子ども記者もいる。

記者体験活動を手法として、地域の情報を発掘し、子ども達の日線で発信することで、子ども達自身が自分たちの住む「まち」に対する愛着をもち、地域の一員として地域に貢献しようとするシティズンシップを育成することを目的

としてきた。

本研究におけるシティズンシップの定義は、より良い社会の実現に向けて行動できる市民として必要な「価値判断・態度」「技能・能力」「知識・理解」を身に付けることである。これら3つの資質・能力を身に付けられるための方法として、子ども記者クラブの活動がある<sup>1)</sup>。

子ども記者クラブの活動とのシティズンシップ教育との関連性は、以下の通りである。まず、新聞記者から指導を受け、「技能・能力」が身に付くよう、取材前に洛タイ新報の記者による記者講座を実施するようにした。さらに、取材方法、写真の撮り方、記事にするポイントなどの「新聞記者としての技」を身に付けることにより、地域や社会を見る目を養うことを目指した。

また、自治体と連携し、市の関連施設などの協力を得て「知識・理解」が身に付きやすいように、宇治市教育委員会の後援を得た。そのことにより、宇治市内の全ての小学校で募集のチラシを配布することもでき、「子ども記者」を募集しやすくなった。教育委員会の後援を受けることにより、保護者は安心して子どもを参加させることができる。

### 2. 研究目的

本研究では、社会教育の一環として実施している「子ども記者クラブ」の活動を、学校教育

で広く実施できるように学校教育の枠組みである特別活動としての実施の可能性について提案する。そのために、特別活動でシティズンシップを育成する視点と特別活動で「子ども記者クラブ」を実施する視点から検討し、関係性を明らかにすることで、特別活動で「子ども記者クラブ」を実施することによるシティズンシップの育成について提案する。

### 3. 特別活動によるシティズンシップの育成

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』から、シティズンシップ教育との関連を検討した。

特別活動の成果について「特別活動は、学級活動、児童会活動・生徒会活動、クラブ活動及び学校行事から構成され、それぞれ構成の異なる集団での活動を通して、児童生徒が学校生活を送る上での基盤となる力や社会で生きて働く力を育む活動として機能してきた。協働性や異質なものを認め合う土壌を育むなど、生活集団、学習集団として機能するための基盤となるとともに、集団への所属感、連帯感を育み、それが学級文化、学校文化の醸成へとつながり、各学校の特色ある教育活動の展開を可能としている。」(pp.5-6)と示されている。学校における集団づくりに重要な役割を果たす特別活動は、学級や学校という社会の構成員として、「より良い学級」「より良い学校」をつくっていくためには、どうすればいいか、児童が主体的に考え行動することを目指している。これは市民社会に当てはまれば、社会の構成員として「より良い市や町」「より良い国」など、より良い社会の担い手となる市民を育成するシティズンシップ教育と同様と考えることができる。

課題として、「社会参画の意識の低さが課題となる中で、自治的能力を育むことがこれまで

以上に求められている」(p.6)と示されていることから、自分達の所属する社会への関心を高め、関わりを持つことが重要である。

特別活動において育成することを目指す資質・能力については、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の3つの視点が示されている。これらの資質・能力を特別活動におけるシティズンシップ教育の視点として当てはめると、より良い社会の構成員としての資質・能力とも合致する。つまり、より良い社会の構成員は、人間関係を円滑に築くことができ、社会に主体的に参画し、自己実現を図ることができるということである。このように、より良い集団づくりを目指す特別活動が、シティズンシップ教育と目標を共有していると言える。

越野(2011)は、生徒会の取組で学校の統合について議論する活動を通して、「この学校は自分たちの学校である」という自覚・認識と、それゆえ「自分たちは発言し要求していく権利をもっている」という認識とが共に育っていると考える。こうした力が、いずれ市民社会との関わりで発揮される主権者としての力=政治的市民性へと発展していくことが期待される。」(p.131)と述べている。

### 4. 特別活動における「子ども記者クラブ」

特別活動は、学級活動、児童会活動・生徒会活動、クラブ活動及び学校行事から構成される。学校で行われる新聞づくりとしては、「学級における係活動としての学級新聞」、「児童会活動における委員会活動としての学校新聞」、「クラブ活動としての新聞づくり」が考えられる(図表1)。

図表1 特別活動における新聞作り（筆者作成）

	学級における係活動としての学級新聞	児童会活動における委員会活動としての学校新聞	クラブ活動としての新聞づくり
対象 <sup>2)</sup>	1年生～6年生	5, 6年生	4年生～6年生
目的	学級の児童が学級内の仕事を分担処理し、児童の力で学級生活を楽しく豊かにする。	主として高学年の全児童が、いくつかの委員会に分かれて、学校全体の生活を共に楽しく豊かにするための活動を分担して行う。	クラブ活動を通して地域の行事へ参加したり、地域の課題解決に向けて取り組んだりするなど活動の幅を広げて展開する
想定される新聞	学級で掲示・配布する新聞	校内で掲示・配布する新聞	校内や地域に向けて掲示・配布する新聞

「学級における係活動としての学級新聞」について、学習指導要領解説には以下のように示されている。「係活動は、学級の児童が学級内の仕事を分担処理し、児童の力で学級生活を楽しく豊かにすることをねらいとしている。したがって、当番活動と係活動の違いに留意し、教科に関する仕事や教師の仕事の一部を担うような係にならないようにすることが大切である。例えば学級新聞係や誕生日係、レクリエーション係など、学級生活を共に楽しく豊かにするために創意工夫しながら自主的、実践的に取り組むことができる活動を行うようにする。」(p.71) (下線は筆者によるもの)

学級新聞は、学級の児童が楽しくなるような情報を、アンケートを実施するなどして集め、記事にして新聞にする。係活動は新聞作りが好きな児童数名が集まって活動をするので、新聞名や新聞の内容、発行回数などは児童が自由に設定できる。活動時間も決まった時間はなく、休み時間や放課後などを活用し、自由に活動することが多い。新聞の形式としては、紙か画用紙に手書きで書き、教室に掲示する形式が多く、学級の児童が読者となるので、新聞に対する評価や要望などはすぐに返ってくるので、読者を意識した新聞づくりがしやすい。

「児童会活動における委員会活動としての学校新聞」については、学習指導要領解説には以下

のように示されている。「委員会活動は、主として高学年の全児童が、いくつかの委員会に分かれて、学校全体の生活を共に楽しく豊かにするための活動を分担して行うものである。(略) 設置する委員会の種類は、例えば、集会、新聞、放送、図書、環境美化、飼育栽培、健康、福祉ボランティアなどが考えられる。」(p.96) (下線は筆者によるもの)

委員会活動として新聞委員会があり、新聞作成を行う場合、高学年の各クラスから選抜されて委員が選出され、委員会活動の時間に活動を行う。したがって、学級活動による係活動とは違い、組織的な運営になる。メンバーと時間と場所が確保されて、教員の指導の下、活動が行われるからである。家庭での新聞購読数が減少する中で、新聞を読むという習慣がなくなりつつある現状では、新聞委員会が設置されている学校は少ないと考えられる。しかし、シティズンシップの観点からは、学校という社会をより良くしていくために、様々な問題や情報を発信する役割を担うため、学校全体に発信するメディアとしての新聞委員会の役割は重要であると考えられる。

さらにクラブ活動との関連で、以下のように示されている。「クラブ活動については、各クラブからの意見を必要に応じて代表委員会に反映させるなど、それぞれの活動がより充実し発

展していくように配慮することが望ましい。さらに、放送や新聞などの委員会の活動によって、各クラブの活動状況についての情報が広く児童に伝わるように配慮することも大切である。」(p.92) (下線は筆者によるもの)

ここでは、クラブ活動と委員会活動との連携の中で、クラブ活動の様子を広報するための新聞委員会の役割を述べている。小学校のクラブ活動は、中学校や高校の部活動とは違い、放課後の課外活動ではなく、教育課程に位置づいた活動として実施されることもあり、クラブ活動と委員会活動の連携も見られる。

「クラブ活動としての新聞づくり」については、学習指導要領解説には以下のように示されている。「クラブ活動において地域と連携・協働するに当たっては、活動を通して育てたい資質・能力を地域と共有することが大切である。具体的には、クラブ活動を通して地域の行事へ参加したり、地域の課題解決に向けて取り組んだりするなど活動の幅を広げて展開することによって、身に付けた資質・能力を生きて働くものとして実感させることなどが考えられる。また、地域人材を活用したクラブ活動や地域の方を招いたクラブ発表会等を通して、地域の活性化や学校との信頼関係の構築につなげていくことも大切である。そのためには、クラブ活動を通して育てたい資質・能力について、説明や打合せを通して、地域と共有することが必要である。」(pp.110-111)

地域との連携・協働や地域の課題解決に向けての取り組みなど、クラブ活動としての活動は、学校外の地域での活動を重視している。したがって「学級における係活動としての学級新聞」や「児童会活動における委員会活動としての学校新聞」は、取材対象が校内であるのに対して、「クラブ・部活動としての新聞づくり」は、取材対象が校外の地域である場合がある。学級や

学校も一つの社会であり、その社会をより良くするという観点からはシティズンシップの育成にもなるが、学校という限られた空間ではなく、広く市民社会に目を向けた方が、シティズンシップの育成になる。なぜなら、学校は同じ年齢の学童による同一性の高い集団であるが、地域社会は様々な年齢、立場の人がいて、多様な価値観があるので、そうした社会について目を向け、考えることがシティズンシップの育成につながると考えられるからである。こうした点で、シティズンシップを育成する特別活動における新聞づくりは、「クラブ・部活動としての新聞づくり」の方が望ましいと言える。

クラブ活動の活動例としては、以下のように示されている。「例えば、児童の興味・関心を基本としながら、地域のお囃子や踊りなどの伝統芸能や文化と関連付けて、外部講師や地域の教育力を活用することが考えられる。地域の実態や特性を考慮して計画を作成することも考えられる。また、ゲートボールクラブなどが地域のゲートボール場等に出向いて、地域の高齢者のチームと交流することや、活動を通して学んだことを新聞などにまとめたり、地域へ発信したりすることなども考えられる。」(p.111) (下線は筆者によるもの)

このように、「地域の課題解決に向けて取り組んだりするなど活動の幅を広げて展開することによって、身に付けた資質・能力を生きて働くものとして実感させること」「地域人材を活用したクラブ活動や地域の方を招いたクラブ発表会等を通して、地域の活性化や学校との信頼関係の構築につなげていくこと」は、本研究で実施してきた「子ども記者クラブ」で活動してきた内容と一致している。また、「児童の興味・関心を基本としながら、地域のお囃子や踊りなどの伝統芸能や文化と関連付けて、外部講師や地域の教育力を活用すること」「活動を通して



学んだことを新聞などにまとめたり、地域へ発信したりすること」も「子ども記者クラブ」で重視してきた。

以上のことから、特別活動で「子ども記者クラブ」を実施する視点としては、特に「クラブ活動としての新聞づくり」において、地域との連携・協働や地域の課題解決に向けての取り組みとなり、シティズンシップの育成に最も有効であることが分かった。

## 5. シティズンシップ教育と特別活動で育成する資質・能力の関連

### 5-1 「子ども記者クラブ」で育成できるシティズンシップ教育の資質・能力

筆者は、これまでの研究で「子ども記者クラブ」の活動がシティズンシップの育成になることを明らかにしてきた（橋本 2016, 2020）。それは学校教育ではなく社会教育での取り組みである。本研究では、その手法を学校教育の中の特別活動で活用することにより、学校教育におけるシティズンシップの育成を検証するものである。これまでの研究から、子ども記者クラブで育成できるシティズンシップの資質・能力は、「価値判断・態度」「技能・能力」「知識・理解」の3つで示すことができる（図表2）。

### 5-2 特別活動で育成できる資質・能力とシティズンシップ教育との関連

一方、特別活動の資質・能力については、学習指導要領解説で以下のように述べられている。

「特別活動において育成を目指す資質・能力や、それらを育成するための学習過程の在り方を整理するに当たっては、これまで目標において示してきた要素や特別活動の特質、教育課程全体において特別活動が果たすべき役割などを勘案して、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点で整理した。これらの三つの視点は、（中略）特別活動において育成を目指す資質・能力における重要な要素であり、これらの資質・能力を育成する学習過程においても重要な意味をもつ。「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点が、育成を目指す資質・能力に関わるものであると同時に、それらを育成する学習過程においても重要な意味をもつということは、特別活動の方法原理が「なすことによって学ぶ」ということにある。三つの視点はそれぞれ重要であるが、相互に関わり合っていて、明確に区別されるものではないことにも留意する必要がある。」（p12）

より良い集団づくりを目指す特別活動は、シティズンシップ教育と方向性が一致している。したがって、特別活動において育成することを旨とする資質・能力である「人間関係形成」「社

図表2 「子ども記者クラブ」で育成できるシティズンシップの資質・能力（橋本, 2020 : p.53)

価値判断・態度	技能・能力	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域への関心</li> <li>・地域協働の姿勢</li> <li>・事実に照らして自身自身の意見と態度を変える開かれた意思</li> <li>・個々人の自発性と努力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・記事でわかりやすく自分の意見を伝える技能</li> <li>・地域の人の経験や考え方を理解し、その価値を認める能力</li> <li>・他の人の意見を受け入れる能力</li> <li>・問題解決をする能力</li> <li>・情報を発信するために新聞を用いる技能</li> <li>・正確な情報を伝えるための技能</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時事的、今日的な問題</li> <li>・機能と変化に富む地域の特徴</li> <li>・個人と地域との相互関係</li> <li>・個人と地域が直面する社会的変化の性質</li> <li>・個人と地域に関連する経済的なシステム</li> </ul>

図表3 シティズンシップと特別活動の資質・能力の関係（筆者作成）

シティズンシップの資質・能力	価値判断・態度	技能・能力
特別活動の資質・能力	社会参画 地域や社会に対する参画，持続可能な社会の担い手 自己実現 集団の中において，個々人が共通して当面する現在及び将来に関わる課題を考察する	人間関係形成 年齢や性別といった属性，考え方や関心，意見の違い等を理解した上で認め合い，互いのよさを生かすような関係をつくる

会参画」「自己実現」の3つの視点を加えることで，シティズンシップで育成を目指す資質・能力は一層向上する。

シティズンシップの資質・能力と特別活動の資質・能力の関係は，シティズンシップの「価値判断・態度」に「社会参画」「自己実現」が加わり，「技能・能力」に「人間関係形成」が加わることとなる（図表3）。

### 5-3 特別活動の資質・能力である「社会参画」とシティズンシップ教育の資質・能力である「価値判断・態度」との関係

「社会参画」については，学習指導要領解説で以下のように述べられている。

「よりよい学級・学校生活づくりなど，集団や社会に参画し様々な問題を主体的に解決しようとするという視点である。社会参画に必要な資質・能力は，集団の中において，自発的，自治的な活動を通して，個人が集団へ関与する中で育まれると考えられる。学校は一つの小さな社会であると同時に，様々な集団から構成されることが，地域や社会に対する参画，持続可能な社会の担い手となっていくことにもつながっていく」（pp12-13）

このように，特別活動における社会参画は「地域や社会に対する参画，持続可能な社会の担い手となっていくことにもつながっていく」ことにより，シティズンシップ教育の「価値判断・

態度」である「地域への関心」「地域協働の姿勢」につながる。

### 5-4 特別活動の資質・能力である「自己実現」とシティズンシップ教育の資質・能力である「価値判断・態度」との関係

「自己実現」については，学習指導要領解説で以下のように述べられている。

「集団の中で，現在及び将来の自己の生活の課題を発見し，よりよく改善しようとする視点である。自己実現に必要な資質・能力は，自己の理解を深め，自己のよさや可能性を生かす力，自己の在り方や生き方を考え設計する力など，集団の中において，個々人が共通して当面する現在及び将来に関わる課題を考察する中で育まれると考えられる」（p13）

このように，特別活動における自己実現は「集団の中において，個々人が共通して当面する現在及び将来に関わる課題を考察する」ことにより，個人の課題に留まらず集団（社会）の課題として考察することが，シティズンシップ教育の「価値判断・態度」である「事実を照らして自分自身の意見と態度を変える開かれた意思」や「個々人の自発性と努力」につながる。

### 5-5 特別活動の資質・能力である「人間関係形成」とシティズンシップ教育の資質・能力である「技能・能力」との関係

「人間関係形成」については，学習指導要領

解説で以下のように述べられている。

「集団の中で、人間関係を自主的、実践的によりよいものへと形成するという視点である。人間関係形成に必要な資質・能力は、集団の中において、課題の発見、実践、振り返りなどの特別活動の学習過程全体を通して、個人と個人あるいは個人と集団という関係性の中で育まれると考えられる。年齢や性別といった属性、考え方や関心、意見の違い等を理解した上で認め合い、互いのよさを生かすような関係をつくることが大切である」(p12)

このように、特別活動における「人間関係形成」は「年齢や性別といった属性、考え方や関心、意見の違い等を理解した上で認め合い、互いのよさを生かすような関係をつくること」が、シティズンシップ教育の「技能・能力」である「地域の人の経験や考え方を理解し、その価値を認める能力」や「他の人の意見を受け入れる能力」につながる。

これまで述べてきたように、特別活動でシティズンシップを育成する視点として、シティズンシップで育成を目指す資質・能力に特別活動において育成することを目指す資質・能力である「社会参画」、「自己実現」を加えることで、シティズンシップの「価値判断・態度」をさらに充実させることができる。また、特別活動において育成することを目指す資質・能力である「人間関係形成」を加えることで、シティズンシップの「技能・能力」をさらに充実させることができる。このように、より良い集団づくりを目指す特別活動によりシティズンシップ教育を充実させることができる。

## 6. クラブ活動としての「子ども記者クラブ」によるシティズンシップの育成

特別活動で「子ども記者クラブ」を実施する

視点としては、特に「クラブ活動としての新聞づくり」において、地域との連携・協働や地域の課題解決に向けての取り組みとなり、シティズンシップの育成に最も有効であることが分かった。そこで本稿では、「子ども記者クラブ」の活動を通して、「クラブ・部活動としての新聞づくり」について提案をすることとする。

### 6-1-1 地域の特徴を取材し地域に発信する記事

子ども記者クラブでは、子どもたちの目線で、地域についての情報を発信する「地域ジャーナリズム」を目指している。どんなことを取材したらいいのかという話し合いでは、宇治ならではの伝統や文化を取材したいという意見が一番多かった。古くから守り続けられた宇治ならではの歴史・文化・伝統について取材した。記事は、取材班で話し合い、みんなで協力して書き上げた。

取材は、歴史的な視点から平等院、文化的な側面から朝日焼、伝統的な側面から昇苑くみひも宇治本店と京都宇治茶房 山本甚次郎を取材した。

### 6-1-2 考察

取材を通して、いずれも後世に受けついでいくための苦労や工夫が感じられる取材となった。子どもたちが知らなかったこと、気付かなかったことも多い。子どもたちが書いた記事の



写真1 伝統や文化を支える人に取材する子ども記者

中では、その重要性や価値を知り、宇治に住む市民の一人としてそれを残していきたい、伝えていきたいという思いがあふれていた。シティズンシップとしての「価値判断・態度」、特別活動としての「社会参画」の意識が高まると考えられる。

#### 6-2-1 地域で活躍している人の生き方を取材し地域に発信する記事

子ども記者クラブでは、店や施設などの場所の紹介をすることが多い。その場所で働いている人の思いや願いを伝えるが、中心となるのはその場所の説明である。

そこであえて「人」に焦点を当て、「仕事へのこだわり」をテーマに取材した。仕事の内容だけでなく、その仕事へのこだわりや誇りなどを取材した。

取材は、宇治で活躍している大道芸人、放送作家、ジュエリーデザイナーを取材した。いずれも子どもたちに馴染みのない仕事なので、仕事内容についても知らないことばかりだった。子どもたちはローテーションで3人全員の話聞いた。

#### 6-2-2 考察

仕事へのこだわりや誇りなどはその人の生き方にも関わってくる。これはキャリア教育になり、子ども記者は自分の将来について考える機会になった。そこでグループではなく、個人で記事を書いた。

仕事内容とともに、三者三様に生き方や考え方も様々で、その仕事に就くまでのいきさつで、様々な挫折や失敗を繰り返して現在に至っているという話があり、子どもたちにとって様々な生き方があることを学ぶ機会となり、職業観や勤労観について考えるキャリア教育にもなった。シティズンシップとしての「価値判断・態

度」、特別活動としての「自己実現」の意識が高まると考えられる。

#### 6-3-1 同世代の子どもを取材し地域に発信する記事

地域で活躍する大人たちを取材することが多いが、子どもを取材対象にする場合もある。テーマは「舞台で活躍する子どもたち」。「舞台」というのは、実際の舞台だけでなく、「晴れ舞台」という意味でもある。「晴れ舞台」を目指して、努力を続けている小学生や中学生を取材した。

取材は、スケートボードのフリースタイルで世界第二位になった宇治在住の中学2年生と宇治市にある子ども朗読劇団を取材した。

#### 6-3-2 考察

同年代の子どもを取材することで、子ども記者にとっても刺激となる取材となった。

自分の好きなことを追究していく姿を取材し、シティズンシップとしての「価値判断・態度」、特別活動としての「自己実現」の意識が高まると考えられる。

#### 6-4-1 地域のイベントを取材し地域に発信する記事

京都文教大学で実施された「ともいき（共生）フェスティバル」を取材した。「ともいき（共生）フェスティバル」は、地域の人へ向けて大学を開放し、子どもからご年配の方、障がい当事者や留学生等、様々な人々が集い、楽しみながら交流する場として2014年より開催している。子ども記者は自分も活動に参加し、参加して感じたことや思ったことも含めて記事を書いた。

#### 6-4-2 考察

地域のイベントに参加し、地域住民の視点で記事を書くことによって、地域の良さを再発見





写真2 認知症の人と交流する子ども記者

したり、共同体の一員としての自覚が持てたりするようになる。

取材では、認知症当事者の方やサポートをする人との交流を通して、シティズンシップとしての「技能・能力」、特別活動としての「人間関係形成」の意識が高まると考えられる。

## 7. おわりに

本稿では、これまでの「子ども記者クラブ」の活動をもとに、特別活動、特にクラブ活動の取り組みとして行う場合の事例を示した。特別活動による集団づくりをシティズンシップの育成という視点で見直すと、より良い集団づくりや資質能力の向上につながることを期待できる。「子ども記者クラブ」の活動が、多くの学校で取り入れられることを期待している。

### 付記

本研究は、2022年度京都文教大学地域志向研究「子ども記者クラブ」の活動を通じたシティズンシップの育成」の助成を受けている。

### 注

- 1) 詳細については橋本祥夫(2020)「記者体験活動を通して、子どもたちのシティズンシップを育成する研究—「京都子ども記者クラブ」の取組を通して—」, 日本NIE学会誌第15号, pp.51-

60を参照。

- 2) 対象は学校によって異なる場合がある。ここでは一般的な例を示す。

### 参考・引用文献

- ・橋本祥夫・滋野浩毅・木田竜太郎(2016)「新聞記者活動を通じて地域の子どもの郷土愛を育むシティズンシップ教育—ローカル新聞社と連携した子ども記者クラブの実践を通して—」教育実践方法学研究第2巻第1号, pp.19-28.
- ・橋本祥夫(2020)「記者体験活動を通して、子どもたちのシティズンシップを育成する研究—「京都子ども記者クラブ」の取組を通して—」, 日本NIE学会誌第15号, pp.51-60.
- ・越野章史(2011)「高等学校におけるシティズンシップ教育としての特別活動実践」和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, No21, pp.125-134.
- ・文部科学省(2017)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編』

